パンタナール通信

一般社団法人 南北米福地開発協会　会報　　２０２３年４月１日　２３５号

世界平和地球村の建設と自然環境の保護

養殖池のパクーを網で囲みながら対岸に追い込む。2月13日

パクーの水揚げ作業をフルに体験したGPAとチャパボラの青年たち。左に岩澤春比古所長、右に佐野道准氏。2月13日

「レダは青年に未来を拓かせます！」

去る2月、ＧＰＡ(Generation Peace Academy：本部米国ニューヨーク市)の青年と引率者の一行が研修のためレダとパラグアイ各地を訪れました。４年ぶり、４回目です。以下、尽力した佐野道准氏の報告です。

２月８日 ５時24分、アスンシオン空港に一行が到着。中井氏と高橋夫人と共に空港で迎えた。１時間ほどしてようやく諸手続きを終え、お揃いのエンジ色のＴシャツを着た一行が姿を見せた。夜行便の疲れる旅であったが、皆元気いっぱいに挨拶してくれた。

２月９日 早朝からオリエンテーションを行い、12時にホテルを出発、夕方ロマ・プラタに到着。焼き肉店で夕食。南米風の焼肉を楽しんだ。

２月10日 ロマ・プラタの屠殺工場を見学。最初からみんな驚いたと思う。牛一頭を屠殺するのに１・５トンの水を要するため、チャコで屠殺工場はできないと思われていたものを可能にした、メノー教徒の信仰と弛まぬ努力の世界がこの工場にある。雨後のぬかるんだ10kmの道を何とか通り抜けて、ここまでたどり着いてくれたバスドライバーにも感謝。その後、ロマ・プラタの歴史と現状とを映像で学んだ。開拓史資料館では、メノー教徒が信仰によって未開の地を開拓してきた、貴重な記録と写真展示などを見せてもらった。かのピリグラムファーザーズと同様の信仰と心情が青年たちに伝わり、深い印象を与えたように思う。

同日午後、船に乗るためにCarmelo Peraltaという町に移動した。米国のメンバーが資金を拠出し合って贈呈してくれた船も停泊していて、同船キャプテンのピーター・パウロ夫妻が準備した焼肉を皆でいただいた。そしてチャーターしておいた観光船に乗り込んだ。

２月11日 船でレダに移動。パンタナールの壮大な景色の中を、ゆっくりと航行していく。文先生夫妻がこよなく愛され、熾烈な霊的闘いをなされたゆかりの地、パンタナール。その同じ場所を、当時の文先生夫妻の心情を尋ね求めつつ瞑想に浸ることができる。途中、先生夫妻が拠点とされたオリンポやナビレキを見ながら、私もその話を青年たちに少ししてあげた。食事も船で準備してくれるので、何の煩いもなく瞑想に集中できる、素晴らしい船旅だったと思う。（四面につづく）

グアラニー族の村の教会を塗装。2月21日

先住民の村マリア・エレーナで。2月16日

レダの公館を訪れたGPA一行。2月12日

古タイヤを美しく塗装する。2月21日

タイヤに入れる土をほぐす。2月21日

土を入れればプランター。2月21日

グアラニー族の村の教会の正面に壁画を描く。2月21日

グアラニー族の村で、祝福された人々を囲んで。2月19日

中田夫人、高橋夫人、村の司祭、中田氏。

もう一つのグアラニー族の村で奉仕活動をするチャパボラとGPAの青年。2月22日

トリニダー・デ・パラナ遺跡へ。2月24日

同村で奉仕活動と交流会を終えて、村人たちとGPA一行とチャパボラ。2月22日。

南米遠望（1）
グアラニー族の悲哀

和田賢一（わだけんいち）

昨年「インディオの聖像」と題する本が出版されました。一昨年亡くなった評論家・立花隆氏と、写真家・佐々木芳郎氏が、30数年前にパラグアイや周辺各国に何度も足を運び取材した、未完のドキュメントを新たに出版したものです。立花氏を追悼する意味もあったと思いますが、１９８６年に日本でも公開された映画「ミッション」を思い起こす人もいて、話題本になりました。

「ミッション」は、18世紀、イエズス会の宣教師が、南米の奥地に住むインディオの人々を伝道し、キリスト教に改宗させると同時に、神を崇めて理想郷を建設していきましたが、南米の支配を目論むスペイン・ポルトガルによって破壊されたため、宣教師は殉教し、インディオは殺戮され、残った人々はジャングルに消えていくという筋書きの映画です。

これは、コロンブスの冒険譚から始まった大航海時代、中南米各地で起こった悲劇的な事実を余すところなく伝える映画として注目を浴びました。「ミッション」はカンヌ映画祭でも圧倒的支持を集めてグランプリに輝きました。パラグアイ・アルゼンチン・ウルグアイに理想郷のさまざまな遺構が残っており、ユネスコ世界文化遺産にも登録されています。

立花氏も、南米に築かれたキリスト教の「理想郷」に魅かれたのは「ミッション」を鑑賞したためだと明らかにしています。イエズス会の宣教師が入植し、グアラニー族の人々はキリスト教徒となって、イエスやマリア、そして天使は無論のこと、聖人たちの聖像まで刻み、崇めていました。さらに教会堂はもとより、生活に必要な建物を建て、日々の糧のために農業を営み、豊かなユートピアを築いたのでした。

宣教師の指導があったにせよ、文化も風習も異なるグアラニー族がキリスト教を受け入れることができたのはどうしてだろうか。理想郷を築き上げながらも、どうして滅ぼされなくてはならないのか。篤実なカトリック信徒であるはずのスペイン人が、狂気に走ったのはどうしてなのだろうか。果たして、欧州から新天地を求めて大陸にやってきた動機はどこにあったのか。

こうした疑問に対して、立花氏は深い関心を寄せて、現地取材と文献読破という手法を存分に駆使して、原稿を書き進めていたのです。未完であるというものの「インディオの聖像」を一読すると謎は氷解していくことを実感します。南米に縁を持つ人にとって、示唆に富む一冊となるでしょう。

そもそもイエズス会は、１５３４年にイグナティウス・デ・ロヨラを中心にして、フランシスコ・ザビエル、ピエール・ファーヴルら７人によって創設され、１５４０年にローマ教皇パイルス３世により承認されました。まさに宗教改革時代の只中で、草創期から世界各地への宣教に積極的に取り組み、戦国時代の日本にもカトリックをもたらしました。その宣教師の一人が、日本史にも登場するフランシスコ・ザビエルその人です。

パラグアイの世界文化遺産、トリニダー・デ・パラナ遺跡。

このイエズス会は、「エルサレムへの巡礼」や「清貧と貞節」等の誓いが立てられた男子修道会で、主な活動は教育活動、宣教事業そして慈善活動の三本柱となっています。エルサレムへの巡礼は、オスマン帝国と神聖ローマ帝国が覇権を争い、東地中海が戦場と化していたために断念。そこでローマを拠点にイタリアからフランス、ドイツへと勢力を伸ばしていきました。

こうした中でイエズス会は、カトリック教会には改革と刷新の必要があるとして、プロテスタントへの攻撃は無論のこと、教会にはびこる汚職、不正などを激しく批判。その結果、教皇や教会の高位聖職者たちから煙たがられる存在になりました。

さらにイエズス会の活動はヨーロッパ諸国の利害とかかわってしまったため、内政干渉という口実でさまざまな議論を巻き起こすことになりました。イエズス会はアメリカ大陸で原住民の権利を主張し、奴隷制に抗議します。キリスト教徒になったインディオを他部族やヨーロッパの奴隷商人の襲撃から守るためにブラジルとパラグアイに「保護統治地」をつくっていたのです。当時ヨーロッパの国々は、奴隷制によって大きな利益を得ていました。

果たして、ヨーロッパの国々は、イエズス会への弾圧に乗り出します。ポルトガルがイエズス会員の国外追放を決めると、フランス、スペインなどがこれに続きます。さらに教皇クレメンス13世に対して、イエズス会を禁止するよう圧力をかけましたが、教皇は拒否。次の教皇クレメンス14世は、当初イエズス会を擁護しましたが、列強の圧力に屈し、１７７３年7月、回勅を発してイエズス会を禁止しました。これを受けたスペインとポルトガルは、アメリカ大陸のイエズス会の伝道所をつぎつぎと襲撃、破壊し尽くしていったのです。その一つが、「ミッション」に描かれた、イエズス会がグアラニー族とともに築き上げた、目を見張るような高い知性と精神性をもった「ユートピア」の悲劇であったのです。

ここに私たちはひとつの歴史的な「宿題」を感じます。政治と宗教は一致して万民のための福地を築けるのか。過去の悲劇をいかにすればかき消すことができるのか。私たちはこの宿題を心にとどめて、真摯に立ち向かっていかねばなりません。■

GPA（一面より続く）　**2月12日** 午前8時レダに到着。降り続いた雨で道路は泥だらけ。蚊の大発生で、初日からパンタナールの野生的洗礼を受けた。

レダ第1日は岩澤所長がレダ開拓の理念と歴史を講義。その後、レダの諸施設とプロジェクトの現場を巡った。多くのメンバーはレダが原野の中にあることを想像していたらしく、立派な研修所などの建物があることにとてもびっくりし、感動していた。

2月13日 レダ第2日は養殖池でパクーの収穫。GPAのメンバーは誰も躊躇することなく、勢いよく池に飛び込んだ。全身びしょ濡れになりながら積極的に、かつ楽しそうに取り組んでいた姿が印象的だった。感想文にもこの体験を書いたメンバーが多い。

2月14日 レダ第3日はカナン牧場へ。レダとは違って、まだまだ未開発のカナン。まずトラクターで奥地に牛を見に行く。そして基地に帰って乗馬を楽しんだ。青年たちも開拓事業の一端を垣間見たと思う。

2月15日 レダ第4日は釣り体験。一番多く釣れるのはピラニア。危険なことで知られるこの魚を初めて間近に見たことが、青年たちにはとても新鮮だった。

グアラニー族の村で歓迎を受けるGPAとチャパボラ。2月19日

2月16日 第5日目の早朝、チャーターした観光船に再び乗ってレダを離れた。昼前、先住民の村マリア・エレーナに到着。2019年にGPAが訪れて奉仕をした村である。学用品を事前に用意し、校長先生に贈呈した。青年たちはこの村の貧しさにとてもショックを受けたようだ。わずか1時間余りの訪問だったが、バレーボールやサッカーで子供たちと遊んだり、接したことがとてもインパクトがあったようで、多くの青年が感想文でそのことに触れていた。

2月17日 早朝、カルメロ・ペラルタの港に到着。チャーターしたバスでサン・アルベルトに向かう。距離は1200km。2日間かけて移動した。

2月18日 夕方、サン・アルベルトに到着。中田実氏がこの町にグアラニー族伝道の拠点を置いている。

2月19日 車で1時間弱走り、予定していた村に行く。初めに牧師と村民によるちょっとした歓迎集会が開かれ、村の青年たちも歌を披露してくれた。その後直ちにペンキ塗りを開始。昼になって、来ていた村人全員に食事を振る舞った。午後、今回のGPAを引率してきた夫妻の主礼により、村の10カップルを祝福。主礼を務めた夫妻がとても感動していた。

2月20日 雨のために予定を変更。中田氏がセミナーハウスに青年たち全員を集め、イエズス会の宣教師がパラグアイに来てキリスト王国を造ろうとした歴史と、中田氏自身のこれまでの歩みを証した。昼からは私の四輪駆動車で、壁画担当グループを現地に連れて行き、少しでも壁画が進むように計らった。

2月21日 晴れたので再び全員で村へ。教会の壁のペンキ塗りは完了し、花壇などを造った。壁画は時間切れとなったが、村の青年たちがそれを完成させた。

2月22日 予定していたもう一つの村へ。交流とTシャツのプレゼント。公園花壇に使う古タイヤを塗装。

2月23日 雨で予定を変更し、イタイプダムの見学に。

2月24日 中田氏の計画でイエズス会の遺跡を訪問。

2月25日 イグアスの滝を訪問。アスンシオンに帰る。

2月26日 アスンシオンの教会を訪問、スポーツ交流。

2月27日 abc新聞社訪問と、お土産ショッピング。

2月28日 アスンシオン空港から帰国の途に就く。

第25回ワンデイセミナーのご案内

- **日時**：4月29日（土・祝）10時開会、16時終了予定
- **会場**：国立オリンピック記念青少年総合センター
- **参加費**：2000円（青年1000円）昼食付き

詳細は同封のチラシをご覧ください。

●レバレンド・ムーンの思想とレダ開発　●レダにおける植樹活動　●レダプロジェクトの展望　●チャパボラ青年のレダ体験報告　●分科会＝親しく懇談

一般社団法人
南北米福地開発協会 事務局

〒213-0001
神奈川県川崎市高津区
溝口３－１１－１５
岩崎ビル４Ｆ

電話：044-829-2821
FAX：044-829-2820

支援金振込口座：ゆうちょ銀行
記号10280　番号61349751
一般社団法人 南北米福地開発協会

e-メール:office@asd-nsa.com
ホームページ:https://asd-nsa.com
Facebook:https://www.facebook.com/ledaproject.jp/

「日陽園便り」はFacebookで

日陽園の最新ニュースは、Facebookを利用してレダの活動現場から発信しています。その主力を担っているのが、チャパボラ（チャコ・パンタナール・ボランティア）たち。若者たちのフレッシュな感性によって発信されるニュース、写真、動画などを、ぜひご覧ください。

コメント欄から、皆様の感想、励ましなどのメッセージを、レダの人々へ送ることもできます。

https://www.facebook.com/groups/1816339478591894/　（ご利用になるには、Facebookの個人アカウントが必要です）

レダ・プロジェクト紹介用パンフレットPDF版

紹介用パンフレットは、ネットでも入手いただけます。

スマホなどの端末で、または印刷してクリアファイルに入れてどうぞ。

https://asd-nsa.com/sk/